

日常生活における痒みの訴えと搔破行為 Itch Complaints and Scratching Behavior in Daily Life

飯山 陸[†], 細馬 宏通[†]
Riku Iiyama, Hiromichi Hosoma

[†] 早稲田大学
Waseda University
iiymr20617@fuji.waseda.jp

概要

本研究は、日常的な感覚・行為である「痒み」、そして「掻くこと」(搔破行為)について、痒みという発話や搔破行為がいつ・どのように行われているかについてデータ分析を行った。その結果、掻いている当人が他者の注意が向けられていない「隙」を突いて掻くことで、他者に痒みについて発話させないことを日常的に行っており、掻いている当人が発話した場合を除いて痒みに関する会話をすることは少なく、会話をしたとしても長くは続かないことが明らかになった。

キーワード：痒み, 搔破行為, Sc 単位, Sc 連鎖

1. はじめに

「痒み」を感じて身体を掻くこと(以下、「搔破行為」とする)は誰もが経験するきわめて日常的なできごとであり、人間の基本的な感覚・行為である。「痒み」と搔破行為は単なる個人の生理的現象ではない。我々は人前で痒みを覚え、我知らず身体を掻くことがある一方で、一人のときのように掻きむしることはあまりしない。この点で、痒みや掻くことは社会的に調整される出来事でもある。それにもかかわらず、「痒み」や搔破行為は、これまで医学的な視点以外で研究の俎上に挙げられることがほとんどなかった。

そこで本研究では、日常的ではあるものの未だ十分に理解されていない「痒み」について、日常において「痒い」という発話や搔破行為がどのように行われているかを分析する。その上で、「痒みの原因を特定し、治療する」という医学的な知見ではなく、「我々は痒みとどのようにして共に生き、どのようにして痒みをやり過ぎしているか」という問題について考える素地を作る。

2. データと分析方法

2-1. データ

データは、国立国語研究所が提供している「日本語日

常会話コーパス」(小磯他 2023) から、痒みについて発話しており、かつ掻くことを多く行っているデータを抽出した。データはある男性 A と、そのパートナーの B が朝食をしている場面(12分36秒)である。会話の内容から A が慢性的な皮膚疾患を持っていることが推測される。A は約12分の間に 60回以上掻いているが、一方、発話で痒さについて「痒い」と直接言及しているのは1回のみであり、「なんか寝苦しそうだね」という B の発話などの、痒みに関する間接的な言及も含めても数回程度であった。本稿では、特に「痒い」という発話が行われている一事例を集中的に分析した。

2-2. 分析方法

データ全体について、搔破行為がどのようなプロセスで行われているかという「行為面」、搔破行為がいつ行われているかという「状況面」、「痒い」という発話がどのように発話され、展開しているかという「会話面」の3つの側面に注目し、行動・会話分析ツール「ELAN」を用いて記述・分析をした。

分析にあたっては、Kendon(2004)や McNeill(2019)が提案した「ジェスチャー単位 Gesture Units」を参考に、「Sc 単位」(Sc は Scratch の略)を定義した。Sc 単位は、リラックスした姿勢の「レストポジション」から始まり、からだの表面に手を伸ばす「準備」(P: Preparation)、表面を掻く「掻き」(S: Scratch)、そして掻いた場所から手を放し、元のレストポジションに至る「復帰」(R: Retraction)の一連の動作からなる。



図1 Sc単位の構成(P→S→R)

さらに、1つのSc単位に対して、掻いている手の部位(人差し指など)・掻いた場所・掻いた回数・掻き方を記述した。

また、「Sc単位」の中には、「復帰」なしに、「掻き」

が複数箇所連続して行われる場合がしばしば観察された。これを「Sc連鎖」と呼び、単一の「掻き」からなる「単一Sc単位」と区別した。

分析は、掻破行為がどのようなプロセスで行われているかに注目する「行為面」、どのような状況で行われているかに注目する「状況面」、そして「痒い」という発話がどのように発話され展開されているかに注目する「会話面」の3つの側面について行う。

3. 結果

3-1. 行為面

12分36秒のデータにおいて、61回の単一Sc単位およびSc連鎖が観察できた。また、「眼鏡を上げる」「パンをとる」などの掻破行為以外の行為との連鎖が見られた。また、掻き方については、爪を立てて「引っ掻く」以外の方法（「こする」「引っ張る」など）を用いていることが観察できた。

3-2. 状況面

「状況面」においては、Aは、Bの視線が向けられていないときに多く掻いていることが観察できた。今回観察できた61回の単一Sc単位およびSc連鎖のうち、Bの視線が向いているときに掻いているのは7回のみであり、それ以外の54回はすべてBの視線が向けられていないときに掻いていることが観察できた。また、Bの視線が向けられている7回は、以下の4つの場合に分類できた。

状況	該当するSc
Bが発話中	Sc17(連鎖), 52(連鎖), 53(連鎖)
Bが動作中	Sc31(連鎖)
Aが復帰の段階	Sc46
沈黙(上記以外)	Sc7, 32(連鎖)

表1 Bの視線が向けられている時の状況

なお、ここでの「Bが動作中」とは、Bがジャムを開けているときである。また、例外であるSc7・Sc32においては、Bの視線がAに向けられるのは0.5秒程度の瞬間的なものであった。

3-3. 会話面

本稿では、紙幅の関係上、特にAが「痒い」という発話を行っている2秒から14秒付近の事例「あさから痒いです」(表2)を集中的に分析する。

まず、語尾の変化に注目すると、冒頭の1-5行目で、AとBは「です・ます」体で会話を行っているが、6-9行目のBの発話からはいったん「です・ます」体は消

える。ところが、Aは10行目で「あさから痒いです」と再び「です・ます」体を使っている。

ではなぜ冒頭で特に「です・ます」体が用いられているのだろうか。そしていったんは消えた「です・ます」体が、なぜ10行目でもう一度用いられているのだろうか。それは、AやBが、撮影されたときの状況について「報告」をしているからである。

001 A	[おはようございます]
002 B	[おはようござい]ます:
	(1.7)
003 B	きょうはブドウパンとクルミ [パンと目玉焼きです
004 A	[はい
	(0.7)
005 A	食べます [か:
006 B	[いいわね
	(0.5)
007 B	わたしはこれ ほら,
	(0.5)
008 A	うん
009 B	きのう話題にしたこれを飲むか:ヨーグルトだから
	Sc1
	(1.9)
-010 A	あさから痒いです:
	(0.9)
011 B	すごいかいてた [よ:-
012 A	[うん
013 B	-寝:てる時
	(2.6)
014 A	>触るだけで<乾燥してるというね
	Sc2
	(0.1)
015 B	あ=
016 B	=これ 食べてみる?-
017 B	=ね:
018 A	[うん]
019 B	[まだ] 早い?
	(0.5)
020 A	まだ早い.
021 B	もうちょっとあった [める?
022 A	[うん

表2 トランスクリプト「あさから痒いです」

Bの1・3行目の発話「おはようございます」「きょうはブドウパンとクルミパンと目玉焼きです」は、映像の撮影開始直後のものであり、映像が撮影されたときの「状況」を説明するものである。ここでBはカメラを意識しつつ、このシーンの状況を「報告」しているのではないかと考えられる。一方、Aは4行目であいつちを打ったのみで、10行目で初めて、この朝の状況報告に寄与している。10行目の「あさから痒いです」は、Bの報告と同じ「です・ます」調であることから、Bの報告と対になっていると考えられる。つまり、Bが朝のメニューを報告する形式と同じ形式でAが「朝から痒いこと」を述べることにより、Aの痒みは朝、第一に報告するに値する習慣的なものであることがここで明らかになる。

続きを見ていくと、Bはその後、Aの「あさから痒いです:」という発話に対し、「すごいかいてたよ 寝てる時」(11, 13行目)と発話している。Aが「痒い」と

いう一人称の表明 (西阪,1997)をしているのに対し, B は自分が知覚できる A の行動に加え, A が知覚しにくい「寝てる時に搔いていた」という新情報を付け加えることで, 会話を展開している。

そして, A は B の発話を受けて, 「触るだけで乾燥しているというね」と発話している。A の「触るだけで乾燥しているというね」が平常体であるのは, ここまでです。すでに B が完全に平常体に移行しているからであり, パートナーという関係性を考えると, A が引き続き「です・ます」体で発話することはここでは不自然になる。したがって, ここで A は「触るだけで乾燥している」という報告を平常体で行っていると考えられる。

さらに, この「触るだけで乾燥しているというね」というのは, 従属節のみで終結する「言いさし文」である。白川 (2009) は言いさし文を「言うべき後件を言わずに途中で終わっている文」である「言い残し」, 「関係づけられるべき事態が文脈上に存在する文」である「関係づけ」, 「関係づけられるべき事態が文脈上に存在しない文」である「言い尽くし」の3タイプに分けている。さらに上村 (2014) は白川のこの区分を利用し, 「関係づけの「という」」をさらに「先行する発話における命題に説明 (または注釈) を加えるもの」, 「先行する話相手の発話を話者自身によって言い換えるもの」の二つに分けられるとしている。A の「触るだけで乾燥しているというね」という発話は, B の「すごいかいてたよ寝てる時」という発話を受け, その説明 (注釈) を加えており, 上村の区分における前者にあたるということが出来る。ここから, A は B の発話を受け, さらに「痒み」についての会話を展開しているといえるだろう。

ところが, このような A の「触るだけで乾燥しているというね」という応答は, B の「あ」によって突然打ち切られる。ここで B は「あ これ食べてみる ねえ」と発話をしていることで, 「痒み」についての話題を打ち切り, 次の話題へと移行している。痒みについての発話はトランスクリプトにおいてわずか5行で打ち切れ, 次の話題に移行しているのである。

4. 考察と今後の課題

4-1. 「搔くタイミング」について (「状況面」の考察)

今回の分析対象では, A は B の視線や注意が向いていないときに身体を搔いていることが観察できた。ではなぜ A は B の視線や注意が向いていないタイミングで身体を搔いているのだろうか。それは, 我々, 特に皮

膚疾患の当事者は, しばしば親しい人から (他人の面前で) 搔くことを注意されてきたからである。例えば, 佐伯・大矢・古田他 (2021) では, 治療の「心身医学的側面」において, 「小児で搔破行動が習慣化されている場合には, 子供が搔いているときには気にとめず, 搔かないでいるときに褒めることを保護者に勧める」とある。このことから, 我々は特に他人の面前で搔くことをしばしば注意されており, 搔くのを見ると, 「搔くな」と注意をしがちであることが分かる。そして「搔くな」という注意は搔いている当人に負の影響をもたらしており, 特に A のような皮膚疾患の当事者においては, 自分が搔きたくて搔いているわけではないことが多いことから, 「搔くな」と言われるとより不快感が増すことが考えられる。

しかし, 搔いている当人は「搔きたい」という欲求, あるいはそれより強い衝動に駆られているからこそ, (意識的にせよ半ば無意識的にせよ) 身体を搔くのである。ここでは「搔きたい」という欲求 (衝動) と, 「相手に『搔くな』と言われたくない」という欲求がある。この相反する欲求を調停する手段として, 我々は相手の視線や注意がこちらに向いていないとき, すなわち「相手の隙」を突いて搔破行為を行っていると考えられる。

また, 「相手の隙をついて搔くこと」は, 搔いている当人以外にも, 他人の搔破行為を見ている側にも利益があることである。というのも, 他人が身体を搔いているのを見た際も, 我々是不快に感じるからである。これは我々にとって直感的に理解できるものであり, 小説においてもしばしば現れる (佐藤,2021)。この他人の不快感を極力なくすためにも, 「相手の隙を突いて搔く」という方法は有効であるだろう。そしてそれは, 「搔くな」という発話をなくしていくことにも繋がる。

このように, 搔いている当人にとって「搔きたい, けど『搔くな』と言われたくない」という相反する欲求を調停し, かつ, 他人の搔破行為を見る人の不快感を極力無くし, 「搔くな」と言われることをなくしていく方法として, 「隙を突いて搔く」という方法が選択されていることが分かる。

4-2. 「痒み」の会話と, その展開 (「会話面」の考察)

分析対象としたデータにおいて, 「痒い」という発話は1回しか行わず, B もまた A の痒みや搔破行為について1回しか直接的に言及していない。ではなぜ B は「痒み」という話題に対して A が発話したにもかかわらず, それ以上言及しなかったのだろうか。まず, 我々

は日常において「痒い」という発話をするのは少なく、自分の皮膚の炎症というデリケートな問題に我々はあまり踏み込むようなことはしない。というのも、掻いている当事者の人以外の他者が当事者の痒みについて言及する際、それは自分の身体に対して他者が急に介入してくるような、ある種の「暴力性」を帯びるからである。今回のデータにおいて、Aの「あさから痒いです」という発話から考えると、Aは日常的に痒みに苦しんでいることがわかる。このような状況において、「痒い」という発話をA以外の他者がすることは、Aに対して暴力性を帯びるような出来事であるだろう。

では、「痒い」という発話が行われるとき、それはどのような機能を持つだろうか。確かに「痒い」という発話は、掻いている本人以外の他者が行うと暴力性を帯びることが多い。しかし、掻いている本人が「痒い」という発話を行った場合、暴力性は緩和されるのである。というのも、掻いている本人が「痒い」という発話を行うことで、「痒み」についての話題提供、つまり痒みについて会話する「枠組み」を作ったからである。事実、データにおいてAが「あさから痒いです」という発話をすることによって始めて、Bが「すごいかいてたよ寝てる時」というようにして痒みについての会話を展開するのである。このようにして、掻いている当事者が「痒い」という発話をし、「痒み」についての「会話の枠組み」を作った際、我々は痒みについての会話を、暴力性を緩和しつつ行うことが可能になるのである。

その後、Bの「すごいかいてたよ寝てる時」、そしてそれを受けたAの「触るだけで乾燥しているというね」という発話の役割は「3. 分析と結果」で述べた通りである。しかし、痒みについての会話はここで終わる。Bが「あこれ食べてみるねえ」と発話し、「痒み」についての話題を打ち切るのである。なぜAの「触るだけで乾燥している」という発話で、痒みについての会話は終了したのだろうか。Aの「触るだけで乾燥している」という発話は、Bにとってはわかりづらいものである。したがってBはここで「乾燥している」ということに同意を示しづらい。つまり、BはここでAの発話に対応する形で、痒みについて発話をする手札を失い、痒みの会話を続けづらくなったと考えられる。

ここから次のようなことが言える。すなわち、我々は「痒み」という、本人の身体に関わるデリケートな話題をあまりせず、たとえ痒みという話題について会話をしたとしても、それは比較的早く終わるということである。我々は自分以外の他者の痛みが分からないよう

に、他者の痒みもまた、どの程度の強さや痛みであるのかがわからない。また、「痒み」という現象そのものがまだ研究途上であるように、痒みは未だ謎が多い現象である。つまり、我々は他者の痒みや、痒みという現象そのものについて多くを知らない。ゆえに、痒みについての発話をあまりせず、したとしても長くは続かないのではないだろうか。

4.3. 今後の課題

本稿は、日常的な感覚・行為である「痒み」そして「掻くこと」(搔破行為)について、分析および考察を行った。本稿のデータについて今後の課題を述べるならば、第一に、Bの視線が向けられているときのAの搔破行為(表1)を、特にSc単位におけるどの段階でBの視線が向いているかということに注目し、分析・考察することである。第二に、「なんか寝苦しそだったね」などの痒みに関連している間接的な発話がどのように展開し、そしてその周辺で搔破行為がどのように行われているかという問題を分析・考察することである。この問題においては現状、間接的な発話もまた、発話されたとしても長くは続かず、本人の発話による「会話の枠組み」構築がされるのであり、暴力性の緩和が行われているのではないかと考えている。「痒み」は医学的にも未だ謎が多い現象であり、本研究もまた、発展途上のものである。今後は上記の課題を分析・考察する形で、本研究のさらなる発展を行いたい。

文献

- 上村昂史.(2014). 「言いさし文」における「という」の諸用法: 終助詞的用法に関する一考察. 言語科学論集, 20, 31-48.
- 小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香 (2023) 『日本語日常会話コーパス』設計と特徴『国立国語研究所論集』24, pp. 153-168.
- 佐藤厚志(2021).象の皮膚 新潮社
- 佐伯秀久・大矢幸弘・古田淳一・荒川浩一・市山進・勝沼俊雄・加藤則人・田中暁生・常深祐一郎・中原剛士・長尾みづほ・成田雅美・秀道広・藤澤隆夫・二村昌樹・益田浩司・松原知代・室田浩之・山本貴和子.(2021). アトピー性皮膚炎診療ガイドライン 2021. 日本皮膚科学会雑誌, 131(13), 2691-2777.
- 白川博之.(2009). 「言いさし文」の研究. くろしお出版.
- 西阪仰.(1997). 相互行為分析という視点: 文化と心の社会的記述. 金子書房
- Kendon, A. (2004). *Gesture: Visible action as utterance*. Cambridge University Press.
- McNeill, D. (2019). *Gesture and thought*. University of Chicago press.